



広島法務局尾道支局と尾道人権擁護委員協議会が実施した第39回全国中学生人権作文コンテスト広島県大会で、日比崎中学校3年 進藤穂波さんの作文が「優秀賞」に選ばれました。

作品を通し、戦争の悲惨さ、命の重みについて改めて考えてみてください。

## 戦争から学べること

「五秒間だけ、懐中電灯の明かりを消してみましよう。」

ガイドの方にそう言われ、私達は一斉に明かりを消しました。突如として現れた暗闇。さっきまで隣にいたはずのクラスメイトの姿も一切見えなくなり、とてつもない恐怖心を覚えました。たった五秒間だけでもこの怖さ。戦争中、ここで過ごした人々は、一体どんな思いを抱えていたのだろう。そう考えるだけで、胸がいっぱいになりました。

私達は、中学二年生の二月、修学旅行で沖縄県に行きました。その初日には、平和学習として、アブチラガマ、平和祈念公園、ひめゆりの塔を訪れることが決まっていた。平和学習をするにあたり、沖縄戦について多少の知識は身につけていったつもりではいましたが、実際に沖縄に行ってみて、インターネットの情報や、映像だけでは決して感じる事の出来ない何かを感じることができたのではないかと考えています。中でもそれが特に強く感じられたのは、「アブチラガマ」への入壕です。そこは、沖縄戦での住民の避難場所、陣地として利用され、のちに南風原陸軍病院の分室として使用されていたそうです。

衝撃の連発でした。「助かる見込みのない負傷兵が闇の中で置き去りにされ、何百人もの兵隊さんが、ここで静かに亡くなられた。」「今の私達と同じくらいの年齢の学生たちが麻酔もない中、負傷兵の手術をしたりしていた。」「米軍が火炎放射等で攻撃をしてきた。」など、ガイドの方に当時についてのお話をたくさんしていただきましたが、最初は、そんなことがあったなんて、正直信じられませんでした。しかし、ガマの中をじっくりと見ていくうちにだんだんと、本当にあったんだなと思いが始まることができました。米軍による火炎放射の黒焦げの跡や爆風の跡があったり、当時いた方々の遺品があったり、生命を繋いだ井戸があったり。ここで苦しい思いをしながら亡くなった方が大勢いらっしゃるんだなという実感が少しずつでしたが湧いていきました。終戦から74年経った今、私達にできることは何だろう。戦争から学べることは何だろう。この修学旅行が、改めてそう考えるきっかけになりました。

私は広島で生まれ、広島で育ちました。そのため、幼い頃から戦争や原爆についてのテレビ番組を自然と見ていたし、当時の話も自然と耳に入っていました。それが当たり前だと思っていました。でも、

「県外の人には、原爆が落とされた日付も知らん人が多いよ。」

と担任の先生が仰っていました。信じられないと思いましたが、仕方ないことでもあるのかなとも思いました。

「戦争の悲惨を後世に伝えていかないといけない」とよく言うし、私もそうしないといけないと思っていたけど、今の時点で、もうあまり伝わっていないのかなと思います。もちろん、戦争は原爆や沖縄戦だけではないことは分かっています。全国各地の空襲や人々の苦しい生活、他にも様々な被害があったと思いますが、もう二度と、戦争という残酷で悲惨な歴史を刻まないためにも、それらをどうにかして後世に伝えていかなければならないはず。また、もしかすると広島の人には戦争について学ぶ時間は長くても、広島のことしか詳しく知らないかもしれません。それと同じように、一部の地域のことしか知らないというのは、後世に伝えていく情報として不十分なのではないかと思えます。だから、広島や長崎、沖縄などを訪れた際には、戦争中どんなことが起こっていたのか、どれだけの人が亡くなったのか、資料館はもちろん、当時のまま残っているものなどから少しでも知り、感じて帰ってほしいと思いました。

戦争から学べること。それは、人には生きる権利がある、人の命の重みに差は一ミリもない、ということだと私は思いました。戦争で亡くなられた方々の命はもう取り戻せないし、戦争に苦しめられた人々の時間ももう返ってきません。戦争という歴史を無駄にしないためにも、戦争のない今を生きる私達が、人の命も自らの命も大切にできる世の中になることを願っています。

「みんなが輝くために」を読まれて、  
みなさんの感想やご意見をお寄せください。

〒722-0041 防地町26-24 人権男女共同参画課  
(☎0848-37-2631・FAX0848-37-6631)